



第 4 8 号
平 成 十 四 年
(2 0 0 2)
7 月 1 5 日 行
(年 4 回 発 行)

「源心コンクール」私論

東 明 雅

そもそも、源心という連句形式(二十八句、四・十・十・四、二花二月)は、平成五年十一月、江戸川区行船公園内、源心庵での勉強会で、平素私が考えていた新しい連句を、主催者(源心の念・場所に因んで源心と名づけ、この会にプレゼントしたものである。

昭和四十五年の連句復興以来、いろいろな人により、いろいろな連句の新形式が考えられ、発表されているが、その中で私が創始したのは二十韻(二十句、四・六・六・四、一花二月)とこの源心の二つである。

二十韻は半歌仙(十八句)より二句多いだけでありながら、結構、序・破・急を備え、いわば歌仙の完全なミニチュア版として、猫養以外の方々にも広く愛用されている。尤もこの二十韻という形式を始めて発表したのは、

昭和六十年の「季刊連句」第八号のことであるから、既に十七・八年経っており、その点、発表して十年そこそこの源心がまだあまり広まっていないのは、当然と言えば当然かも知れない。

周知の通り、現在でも万人が推賞する最高の連句形式は歌仙(三十六句)である。それは長すぎもせず、短かすぎもせず、初折オモテ(六句)、初折ウラ(十二句)、名残の折オモテ(十二句)、名残の折ウラ(六句)と均整のとれた絶妙な配分、そして、その中に二花三月、序・破・急のリズムが潜められ、捌きも連衆も十分楽しんで、しかも飽きない工夫が凝らされているからである。

ただ、発句から揚句まで一卷三十六句を首尾するには、練達の捌き手でも、四時間乃至五時間必要だろうが、現代人にはこの時間的余裕が段々無くなっているのではあるまいか。連句復興以来、新しい形式が次々に出現したのも、この時間の制約をいかに切り抜けるかによるもので、はっきり言って二十韻は二・三時間、源心は三・四時間の余裕がある場合を狙ったものであるが、二十韻が容易に受け入れられ広まって行ったのに、源心がなかなか広まらなかったのは、三時間という余裕は我々の現実生活の中に比較的生まれやすいし、二十韻は半歌仙にくらべ、形式的にすぐれていると考えられるのに対し、四時間という時間的余裕は中途半端で、現実にもあま

りない上に、四時間でも無理すれば歌仙一巻が巻けるし、せつかく四時間で巻けるならばちゃんとした歌仙を巻きたいというのが大方の意見であろう。

しかし、折角の四時間をじっくり楽しむのなら、皆最も苦手とされる制約だらけの表六句の難関を四句で済まし、ウラとオオの二十句を丁々発止と存分に斬り結べたら、これが源心の最大の魅力ではあるまいか。

私は同じく私が作り出した二つの新しい連句形式でありながら、いわば兄分の二十韻がひろく世に愛用されているのに対して、弟分の源心がいつまでも陽の当る場所に出られないでいるのに、ひそかに心を痛めていたが、今度の源心の会による「源心コンクール」の成功で、その良さが再確認され、多くのファンを生んだ事について、本当に嬉しいし、感謝申し上げます。

ただ、私はかねがね現在の連句界に不足しているのは、正当な批評精神と、信頼出来る連句批評家であり、引いてはその批評を可能ならしめる連衆心であると考え、それらが育つように努力して来た。

その点から言えば、コンクール(競演会)という形はどのように細心の注意を払っても光の反面には必ず陰を生ずる。コンクールという名にとらわれず、源心を募集して、それを批評するうまい方法はないものか、お礼とともに希望を申し上げる次第である。

菅原道真公御神忌壹千百年大祭記念
第十六回藤祭奉納正式俳諧

平成十四年四月二十五日
於 江東区・亀戸天神社

次第	役割
一 序鼓め	宗匠 豊田 好敏
二 序入り	脇宗匠 佛測 健悟
三 配硯	副宗匠 橘 朱鷺子
四 献花	執事 島村 曉巳
五 執事呼び出し	知司 生田 目常義
六 文台廻き	副知司 吉村 ちみこ
七 俳諧興行	副知司 八代 嫺
八 花前	座配 鈴木 美奈子
九 玉串奉奠	座見 秋山 志世子
十 花の匂披露	花司 松本 碧
十一 端作り	配硯 日高 玲
十二 吟声	同 秋山 志世子
十三 文台返し	同 棚町 未悠
十四 作品奉納	
十五 納硯	
十六 挨拶	
十七 退席	

奉納 俳諧之連歌

二十韻「ご神忌も」の巻

ご神忌も千百年や藤重る	東 明雅
舟の橋渡る類に柔東風	上月 淳子
野遊びに疲れ眠れる子を抱きて	佛測 健悟
ピアニツシモに流る組曲	鈴木 美奈子
稿成ればことさら明かき夜半の月	橘 朱鷺子
植木鉢より秋茄子とる	吉村 ちみこ
さんま焼くいつしか君はわが背に	八代 嫺
天使のやうに受胎告げたり	松本 碧
ボヘミアングラスに透けるロゼワイン	秋山 志世子
豪華客船濤霧晴るる中	生田 目常義
父の日は窓向け放ち留守居する	日高 玲
笑顔見て笑顔練習	棚町 未悠
素腕の髭の扱手は佐き上戸	近藤 守男
夕月照らす門の柵	青木 泉子
まろびつつ抱きつ羽咋凍砂丘	倉本 路子
じゃじゃや馬やとと妻におさまる	佐古 英子
押へれば蛇口の水は横に飛び	青木 秀樹
秘密基地にはメンコビー玉	高橋 豊美
乾門ふとき円花万葉	豊田 好敏
蜂飼ふ人と歩む里山	執事 半

「藤の香や」 東明雅 捌

藤の香や文台捧ぐ御宝前

笙箏の楽に惜春

親里を離れ来し身に雉鳴て

スクールバスで通ふ友達

月が訪ふペランダの鉢水をやり

青唐辛子煮てはやきもち

休み日はいつもいそいそ出る亭主

ニュース速報付けっぱなしに

頼末はずぶずぶ政治暴かれる

悪智恵の奴皆に憎まれ

爽籟に猫の集會児が囲み

脇役人生歩む夕月

まんびきを焼きて肴に盗み酒

混血の娘は美女か悪女か

乙姫と契結びし珊瑚礁

波照間島に住みて半生

燃料の消費激しき檻樓車

長い電話に暮るいらいら

サキノフォンやはらかに吹く花の曲

紙風船をたたむ広縁

明雅

良子

芙紗

優希

寿子

藍

雅

良

紗

希

寿

藍

雅

良

紗

希

寿

藍

良

執筆

連衆 本屋良子 根津芙紗 近藤優希

杉山寿子 矢崎藍

「亀戸の亀」 青島 ゆみを 捌

ご宝前亀戸の亀聞きにこよ

千百年を謳ふ春尽

若芝にボーイスカウト輪になりて

山並はるか走るワゴン車

洪団扇とり出しあふぐ赤き月

ご新造さんは粋な紗すがた

みつめ合ひ荒くなりたる息づかひ

横浜に逢ふ恋のマドロス

遠くでは砲火の絶ゆることもなく

国家といふ怪民族といふ怪

持たされた携帯電話身も冴ゆる

菜をいくつか買ひたしておけ

机上には歴史マンガの積み置かれ

壬生浪人に憧れる秋

僕だよと残る蛍の月に訪ふ

かくれ遊びは鮭の番屋で

一升酒回し呑みする洞間声

トルシエジャパン夢のふくらむ

名優の舞へる道行花燦々

時にそよ風蝶のゐる道

ゆみを

美奈子

達子

征以子

佐紀子

奈

紀

以

を

奈

達

紀

以

奈

奈

達

紀

達

を

以

連衆 鈴木美奈子 篠原達子

金山征以子 間佐紀子

「釣詩鈞」 木村 真呂 捌

藤浪や菅公と酌む釣詩鈞*

のどかに眠る庭の撫牛

楽堂に春の調べを奏づらむ

ちよつと気取つて縞のポータイ

山の端に明けやすき月かたぶきて

汗のはりつく髪の嫺々

仮面舞踏会妻とは知らず誘ひ込み

遺言状をまたも書き換へ

一枚のサッカー籤が大当たり

アフガンの児へ献金の箱

辿り来し地雷埋もる野の末に

廃寺なれども撞けば鳴る鐘

もしかしてあれは母かも雪女

からめた足でふと目覚めたり

連子窓透かして月の覗く闇

唧々すだくまぎれ蟋蟀

うそ寒の画家愛用のベレー帽

今に懐かし放浪の日々

花時の隠り口の里賑はひて

いつしか現れしあはき初虹

真呂

千町

路子

英二

珠枝

千

同

二

珠

路

千

路

千

珠

路

二

千

路

二

珠

連衆 原田千町 軍司路子

日高英二 花巻珠枝

*釣詩鈞 酒の異称。典故は蘇軾「洞庭湖春色詩」

「神いころ」 久保田 庸子 捌

掌に藤の房受け神いころ 庸子

千百年の香ぐはしき東風 路子

浅刺めしセツトにプリン添へられて 守男

友に借りぬしナイフ切れない 碧

月涼し港に殖ゆる船数へ 佐喜子

雇用保険を貰ふ満額 男

金欠の画描きは捨ててケ・セラ・セラ 碧

ニース・カンヌと恋の遍歴 喜

幾十度「まだみ」に染めし黄八丈* 路

刑期を終へて開く便利屋 碧

冬山に勢ふ犬を共に連れ 庸

厚き氷のぴしと張りある 男

失ひし乳房を隠す野天風呂 路

息子の嫁と逢引きの月 碧

菊薫る園遊会に畏まる 喜

秋の蛍のゆらと過ぎゆく 路

奪衣婆のリサイクルショップ白ばかり 同

軒に干しあるサッカーシューズ 碧

留学生肴持ち寄り花見酒 男

土の匂ひを纏ひ走る子 喜

*まだみ 八丈島に自生する木、樹皮が黄八丈の染料になる。八十回余も染められて黄八丈の藍色が出る

連衆 倉本路子 近藤守男

松本碧 山口佐喜子

「佃島から」 権頭 和弥 捌

藤まつり佃島から飛機の脚 和弥

醤油でつめる初鮎の艶 孝子

黒あげは生れし坪庭訪れて 靖子

こけしの眉を細く引く午後 景翠

冷やで飲む一人ぼっちの月と俺 たつみ

風の通りて軒草蒲揺る 常義

海峡は愛のメールの交差点 翠

触ってみたい将校の髭 孝

戸を叩く音の地を這ふ路地の闇 義

寝たふりしたる飽食の犬 靖

狂王も法王もゐる山眠る 孝

ひい爺さんの素振りひやひや 弥

ナイトショースパニールに目も眩み 孝

ダブル不倫は更待の月 翠

降圧剤少し効き過ぎそぞろ寒 弥

枝豆ぼつりぼつり食らへる 義

行商の宿は魑魅と共にゐて 翠

何かよい事ありさうな頃 翠

同窓会分教場は花盛り 翠

囀り高く孫のお絵かき 靖

連衆 坂本孝子 関口靖子 岩垂景翠

山寺たつみ 生田日常義

「奉書にて」 佐古 英子 捌

奉書にて俳諧献ず弥生尽 英子

心字の池に揺るる藤房 弘子

コンチエルト第二楽章のどらかに 昌子

天才少年注目の的 洋子

新星を従へ上る夏の月 曉巳

氣を引くために毛虫這はせる 弘

傷口をここぞと吸って熱きキス 昌

ご当地予報いつも当たたらぬ 昌

野茂石井大リーガーの助け合ひ 昌

好きな焼肉カルピタン塩 巳

酔どれて万札いれる慈善鍋 洋

軒の水柱の続く街角 弘

看板の元祖本舗がそこここに 洋

走り蕎麦打つ碧眼の聲 巳

入り浸る曖昧宿に月明かり 昌

別れた後で吹いたひよんの実 昌

ノルウエーの森に獵犬放たれて 英

忠君愛国削除する本 洋

夢を追ひ花追ひてはや還暦に 弘

朝な夕なに眺む蜂の巣 巳

連衆 市野沢弘子 中野昌子

篠田洋子 島村曉巳

「小宇宙」 鈴木 千恵子 捌

「にぎやかな町」 高橋 豊美 捌

「からむかほり」 中田 あかり 捌

藤房の傘の先に小宇宙 千恵子
 水輪つぎつぎ生まる惜春 嫺
 風車ベッドの嬰を守るならん 利子
 ハモンドオルガン緩く奏でて 未悠
 尖塔に架かる凍月光増し 良彌
 輝の手でひしと抱きあふ 有史
 馴初めは君のかはい捨て科白 嫺
 閑僚人事変へるものかと 利
 デフレてふ名の怪物ののし歩く 彌
 飽きることなき万華鏡なり 嫺
 神保町古書をあさるも業平忌 利
 アイスコーヒーのどをうるほす 史
 アルカン綱渡りして不意に消え 悠
 愛しき人に女郎花折る 史
 十六夜に彼の遺伝子受けとめて 悠
 虫の声聞く輪廻転生 彌
 米寿までマラソン挑戦目標に 利
 一合程の酒が活力 嫺
 末吉の末のゆかしく花万葉 千
 佳き日良き友仔猫つどひぬ 史

連衆 八代嫺 梅田利子 棚町未悠
 佐藤良彌 荒川有史

にぎやかな町の方へと藤の風 豊美
 春の日傘の渡る丹の橋 久美子
 到来の浅蜩のびのび汐吹きて 志世子
 珈琲注ぐ手びねりの碗 良子
 月冴ゆるストラディバリウスきしむ音 一枝
 クリスマスには父帰るてふ 豊
 はてさてと隠し子同土恋に落ち 久
 くせも好みものめりこむ質 良
 文楽の席を離して二枚買ふ 世
 売り家の轍角ごとに立つ 久
 昼寝覚夢のつづきはこのあとと 良
 アバンチュールは水上スキーで 久
 マイタイにマルガリータで酔はされて 豊
 やゝ寒の脚強くしめつけ 良
 印材の瑪瑙の肌を照らす月 世
 厨の窓に揺れる干し柿 良
 アラスカに「荒野の呼び声」聞きに行く 久
 オーロラの下記念撮影 枝
 花衣纏ひて舞ふは誰ならん 良
 婆と婆との会話長閑に 枝

連衆 副島久美子 秋山志世子
 山口良子 西田一枝

かしはでにからむかほりや藤祭 あかり
 めかる蛙の覚むる石橋 美恵
 春炬燵古文書山と積み上げて 健悟
 子のケータイがさつきから鳴る 慶子
 風呂あがり大の字で寝る夏の月 芳梅
 馬の脚でも亭主関白 悟
 網タイツ見せるつもり肌のきめ 恵
 町名変更名のみ美し 慶
 喜々として元船長が蕎麦を打つ 悟
 ペットのふとんブランドで買ふ 恵
 木枯しの静まりてゐる午前二時 悟
 高所恐怖の魔女低く飛び 恵
 間違へて隣のドアを叩く彼 梅
 コンピューターが抱けと言ふから 同
 月の暈写真を伏せてさやうなら 慶
 紙のお城をよぎるうまおひ 悟
 ゲール語を話す馭者ある秋乾 慶
 珍陀の酒と同色のタイ 恵
 花の散る音を聞かんと腹這へり 同
 巣箱は縁にやりかけのまま 悟

連衆 山口美恵 佛淵健悟
 由川慶子 小野芳梅

「風来人」

中林 あや 捌

「光陰の」

登坂 かりん 捌

「江戸人」

松原 弘子 捌

風来人ゐるらし藤の騒ぎけり

一直線に飛んでゆく虻

春暖炉手品のカード配られて

母の電話のたわいないこと

月昇る青く染まるは熱帯魚

ビーチャオルで隠す胸元

きつと君あの豪快な笑ひかた

お疲れさまと終る会合

長椅子の新聞たたむ散髪屋

オージービーフ犬も大好き

南無阿弥陀結願寺まで杖の寒

代りばんこに咳とくつきめ

なにもかもにつぼんと逆サンパウロ

エマニエルなら昔なじみさ

愛しさのいやます月の明き闇

枝にからびし鴉の早費

山の民醸すどぶろくほどよくて

ツーリングにはロードマップを

たもとほる漕艇場の花の屋

とろりねむたげ桶の馬鹿貝

連衆 下鉢清子 吉村ゑみこ

梅田實 大島洋子

光陰の関がごとき藤の色

穀雨静かに降りそそぐ苑

春障子少し滑らせ声かけて

目札おくりシガー四、五本

ブランド街月の夕べの金魚売

浴衣で決めて恋の吉宗*

ひとすぢに撥で弾き切る相聞

何でもかでも科学するいま

猫族と犬族ありて共存す

ピースボートに夢はそれぞれ

港凍てコスモポリタン背をまるめ

寒鴉とぶ尖塔の上

出がらしの薄珈琲の飲み残し

早く抱いてよ秋が行っちゃう

悪女ぶる嫦娥しだいに淑やかに

長城越えて吹ける高西風

老いぬれば葉研転がす隠れ里

陶磁のかけら百万で買ふ

この国を捨てかねつ逝く花明り

ジョギングコース土匂ふ方

*吉宗 長崎料理の老舗

連衆 橋朱鷺子 横山わこ 若林文伸

江戸人となりて廻るや藤祭

吟声太くひびくのどらか

若鮎の泳ぐごとくに焼かるらん

幼に教へ綾取りの橋

見上ぐれば月クレインにぶら下がり

甘く漂ふ苔桃の酒

蛇穴もあなたとならばどこまでも

エンターキーで場面転換

ウイルスに冒されつひに難病に

雷様の太鼓毀れて

土用凧伝空海の飛白の書

励まし系とちよいボラをする*

再会の国民学校同級生

ラスベガスには五人目の妻

トライするラガーは月も抱へ込み

烏兔匆々の毛糸編みをり

畦づたひ近道新興住宅地

宅配便でおふくろの味

海峽を蝶渡らせて花吹雪

あのメーデーも夢のまた夢

*ちよいボラ 気負わず自然にちよっとボランティヤをする

連衆 青木泉子 中村ふみ

武村利子 豊田好敏

「菅公」

橋野 代々子 捌

「菅公の遺徳」

東 郁子 捌

藤房の揺れ菅公を誘へり

代々子

水面さわがず蛙子の群

志げ子

紙鷺下書きの図を工夫して

恭子

雑誌選り分け整理する棚

さえ子

月の庭現れし狸に餌付けせむ

了齋

凍つる吐息に騙しだまされ

齋

プロデューサーキスの稽古に熱中し

志

リクレーション流行るこの頃

恭

「山麿」の酒瓶透かし茜雲

齋

児を呼ぶ声の峽に研す

恭

岩魚籠いつもながらの釣り自慢

志

商ひ看板心太のみ

さ

休へてもツンと涙の喧嘩あと

齋

名残りの蚊帳に膝で耳搔

恭

観覧車月に抱かれ小さき旅

さ

パリの歓迎相撲鬘付け

志

無一物生まれ来てまた還りゆく

齋

遊びせんとや俳諧の道

志

降りしきる花に埋もるる鬼瓦

恭

溢れんばかり夢にてふてふ

さ

連衆 蒲原志げ子 式田恭子

難波さえ子 鈴木了齋

菅公の遺徳偲ぶや藤の下

郁子

穀雨の晴れ間甲羅干す亀

秀樹

春炬燵うからやからの寄り合ひて

麻子

五目ちらしは母のお得意

アンス

山国へ帰省の日取定まりぬ

桂子

君の瞳に涼やかな月

玲

贈られしメキシコパールイヤリング

桂

評価わかれる首相一年

樹

W杯迫り忙しきおまはりさん

麻

ジョギングすれば太きくつまめ

樹

冬籠り言はずもがなの議論する

玲

座敷童子が笑ふ屋根裏

桂

終電に月と呑ん兵衛置き去られ

玲

画家とモデルの二科展の果

桂

そぞろ寒出湯の里の新所帯

樹

地機紬のおとなしき縞

ア

三井寺の鐘力こめ撞きにけり

麻

旅寝の床に故郷の夢

ア

あれこれと訳ありげなる花の主

樹

仔馬遊べる広き原っぱ

ア

連衆 青木秀樹 内田麻子 松島アンス

羽場桂子 日高玲

忘れられない付合④

没句復活のマジック

鈴木 了齋

約二年前、本格的な連句体験としては二度目のときのこと。その一年前の初体験のときと同じ、飄々とした仙人のようなお捌きだ。お捌きの月の句に続き、源実朝の面影を受けた句が出て、これに私が付けた初案は「いい句なんだけど、ちよっとベタベタに付きすぎだねえ」と没。めげずに提出した別の拙案で治定となった。

かの凍月を狙ひ撃つべし

水壺

唐船の船出の夢も古り古りて

魚彦

六十路で習ふ外ツ国の詩

了齋

初体験ですっかり連句に魅せられ、一年間関連書を読みあさり自習した甲斐あって、今回は発句も私の句が採用になり、付句も順調だ。

裏にさしかかり、私の恋句に魚彦さんの恋句が続く。そこでお捌きが「次はさっきのあれをいただきますよ」と、短冊の山から一本を取り出した。先程私が「唐船」に付けた没句だ。

レコの下紐気にかかる夜

了齋

手に負へぬじらし上手に生れつき

魚彦

心に滯の残る晩年

了齋

自分で言うのも何だが、絶妙の恋離れではないか。ただのベタ付き没句だったのに。

言葉は他人の目を介し、他人の言葉と関すること、作者の意図を大きく凌駕して可能性を拓ける。自分は連句の何を面白いと思つたのか、はつきり自覚できた驚きの体験だった。

ただのおばさま 小出 きよみ

「おぢいさん、きよみさ、つてそんねに美人かい？」

「いんね、ただのおばさまだ。」

この会話のことを思い出すと、ほんわかとした空気に包まれ、口許を綻ばしたくなる。

これはいつ頃の事だったか。芦丈先生がお亡くなりなつて後、お孫さんの美紗さん（現在の芋庵の庵主）にお目にかかった或る日

だったような気がする。美紗さんからお聞きした思い出話の一節である。その時の会話は殆ど忘れてしまったが、ここの処だけは鮮やかに憶えていて、時たま思い出してはにんまりとする。美紗さんはこんな話もした。

「毎月の信大連句会にはおぢいさんは嬉しそうに行きました。朝四時から起きて、資料など持ち物を揃えて大きな木綿風呂敷の包みを作つたり、今日着て行くものの段取りを着けたり、そんなことをいそ／＼とやっています。八十歳も後半にかかっているのに、時間が来ると風呂敷包みを提げ杖を片手に一人で出かけたのです。」

「帰宅して夕飯の時など家族が集ると、必ず『今日、きよみさなあ。』と口を開き、付の場面などを聞かせるのです。毎回『きよみさ』が出てくるので、この年寄りでも大変な美人に心動かされたのかと思つて、尋ねると、『いんね、ただのおばさまだ』との返事

だったのです。」

このお話を思い出すと、なぜか肩の力が自然に抜けて何となく穏やかな気分になれるので、何回でも思い出している挿話だ。

その後何年か後に、「りんどう」の藤岡筑邨から、或る女性の会に、「女性と俳句」という題で話をするように言われ、第一回の時、話の中に芦丈先生のエピソードを交えたことがあつた。

「・・・筑邨先生はたいへん純粋な方でいらつしやいますので、俳句の効用とか功德などと口にしたら御気分が悪いと思いますが、（先生はその時会場にいらした）、皆様我慢してお聞き下さい。私は、自分も含め女性は男性と較べまして現実的であり、実利的であり、即物的であるように思います。そんな女性の特質に訴えて、俳句の宣伝をしたいのでお聞き願いたいと思います。」

私の連句の師は東明雅先生で、明雅先生の師は、かの有名な伊那の根津芦丈先生です。

この芦丈翁は実に強記博覧で、九十五歳の生涯を終えられるまで、蕉風の俳諧を後世に伝えるという使命感に燃えておられました。この芦丈翁が常に口になさっていた事は、『人間の五体は頭脳が支配している。頭の錆さえ落しておけば、健康なよい晩年が得られる。連句や俳句は頭の錆落しにはまことによい道具である。』という事でした。・・・皆様この道具を使って今日から頭の錆落しにかかる

うではありませんか。」

芦丈先生は人一倍大きな頭蓋を持っておられた。あの大きな頭の中に上等な脳ミソがいっぱい詰まっていたのだろう。私の脳ミソなんか質量ともどの位か自分でよく分つてい

懐かしい芦丈先生との付合

年上の女はとかく悪女めき きよみ

こんな木片が恋の錦木 芦丈

しはぶきしはぶき僧の勤行 み

畳まで四明の山の影を曳き 文

織糸捌く爪をかばひて み

くぼったゴムのはさみ当らず 文

悪童の憎まれ口のきりもなく 文

河童夜な夜な胡瓜盗みに 文

男女のことは神が知るのみ 文

潮騒が夢のどこかに入りまじり み

秋嬉し膳は初もののみにして 文

恋の傷手の既にうすらぐ 文

かたみ子の背丈前を見後を見 文

昔を今に

—巡礼行—

権頭 和弥

秩父札所のご開帳の年なので触れてみる事にしたい。秩父札所の江戸出開帳の古い記録は、元禄五年（一六九二年）十八番神門寺と伝えられている。寺が破損しても、地元の力では補修ができないからと、江戸出開帳を許可して欲しい願いが、寺社奉行に出され、元禄十一年許可された妙音寺（現十七番寺）の記録も古い。地元、秩父としては巡礼を待っている居開帳よりも、江戸に出て開帳する方が収入も多かつたのであろう。山伏を中心として味を知っての出開帳寺が、その後何か寺があつたようである。

西国三十三か寺、坂東三十三か寺、秩父三十四か寺、合わせて百か寺の供養塔と銘のある石塔が、所沢市小手指原にあるが、文京区大塚護国寺境内の秩父三十四か所惣開帳供養塔が一ばん大きな塔のようである。

第一回江戸惣出開帳は「前代未聞無之儀」と、出開帳日記に見え、明和元年（一七六四年）七月から六十日間行なわれている。二回目は、安永四年（一七七五年）八月から、やはり六十日間開帳され、九月には將軍家治の参詣があつたほど盛会だったと伝えられている。

碑文の中に、地元秩父の岩田三郎兵衛昌寿

の名が見える。この人は、当時秩父山中で、

鉄の採掘を行なっていた平賀源内と交友の間柄であつた。江戸出開帳を盛り上げた背景に、源内のプロジューズがあつたことはいうまでもなかつた。文化文政頃の記録によると、一カ年の秩父巡礼の数は七万人になつたといわれ、この事を熟知している二人は、盆地の経済の支えを、江戸出開帳に結び付け、宣伝と実益を兼ねての成果を狙つたものと思われる。今、秩父は、総居開帳で賑やか。午歳十二年目毎、平成十四年は、その当たり年である。

今年は、さくらの花に始まる数々の花の咲き満ちる時の早さの招きにあいて、老若男女が、グループで、バスツアーで、白装束にスニーカー姿、同行二人の文字を身体衣装のどこかに、ちらばめながら、健やかに参っている。札所の寺々へ、観光土産の店々へ、鉱泉宿、民宿へと、信仰と行楽の旅路を楽しんでゐる。昔の紀行文に、

「ことし、宝曆（一七六四年）とをあまりよとせ、はるハをとついに尽きぬといひし日、まだしののめのほどに家を出でて、すみだ川をわたる、空もこころようはれにたり」

と、のどかに巡礼に旅立っている様子が、『伊香保のくちすさみ』の中に載っている。峠路の苦しみ、食事の難儀さ、まずさ等、道々の険しさのほどが察しられる記録も残っているかと思うと、十返舎一九の『諸国道中金の草鞋』の秩父巡礼紀行の一節にあるよう

な戯れ言もある。

「むこうからくる巡礼の女を見さつし、ぼつとりとして、とんだうつくしいものだ」

「けふは、ばばあたちばかりで、ろくな女のさいけいのない日だ」

「これこればあさん、晩の泊りにやおまへのこしからふともものあたりをいたくないやうにそろ／＼やわ／＼と、わしがもんでしんぜたいが、なんともませる気はないかのう」

「ばかなこといわつしやい。わしももう七十じゃ、そんな気イないわい。それとも、ゑどへいったときの、おのへのきく五郎どのなら、それこそ、わし、よつびでもんでもらいとうござるが……」

昔も今も同じよう、娯楽と信心の旅を続けるうちに、気が付かなかつた己を見つけることができるかも知れない。巡礼行は、カタルシスの行程なのであろう。

神門寺

農の手のご朱印の筆のどらかに

和弥

法雲寺

箭の石のはずみに生まれけり

同

今官坊

踊りの輪くづれ恋の部に入りぬ

同

野阪寺

花片の水を解きて坊の鯉

同

金昌寺

山門の慈眼にこぼる梅雨雀

同

「山頭火とレンブラントの

ミスマッチな考察」

大島 洋子

放浪と行乞の俳人、種田山頭火と光と影の画家と言われるオランダ絵画の巨匠レンブラント、ここにどんな考察の接点があるのか、多分大した接点などないのだが、かつてこの二人についての番組を制作する機会があり、どうもその時から二人は似た者同士という気がしているのである。

両者共いい仕事している割には性格的に大きく欠落した部分がある。山頭火はご承知のように大の酒好きというより溺れる程の無茶苦茶な酒飲み。片やレンブラントは骨董品愛好者というより破産するまで買まくったという、どうにも止まらない人達なのだ。酔うてこぼるぎと寝てゐたよ

蝉しぐれの飲むな飲むなと熊蝉さけぶ

山頭火の二句、さすが酒の句はリアリティがある。

もう一点似た者同士と考える理由は、生涯に作り続けた作品が非常に多いこと。山頭火はおおよそ一万二千句、一万句というのは他に一茶ぐらいいしかないそうである。レンブラントも負けていない、肖像画を得意としていた彼は日記をつけるように自画像を描き、現存する自画像の作品だけでも百点以上、これはゴッホを断然上回り堂々の一位。つまり山

頭火もレンブラントも毎日毎日自分を見つめる作業を続けていたのである。

“生きることは作ること” 芸術家としては模範的なライフスタイルなのだが、芸術は往々にして不幸の代償として生まれることが多い。生涯一万点の俳句と百点の自画像、これは相当な不幸に見舞われたに違いない。共通点の三点目は不幸の代償としての創作について。

どうしようもないわたしが歩いてゐるうしろすがたのしぐれてゆくか

『私たち一家の不幸は母の自殺から始まる』と山頭火は述懐している。裕福な家に生まれながら、父親は放蕩三昧、それを苦にした母親は古井戸に身を投げて命を絶つ。山頭火十一歳の時。このことは生涯拭う事のできない不幸の刻印として彼の心に焼き付いていくことになる。その後神経衰弱を患い、生家の没落、弟の自殺、結婚生活の破綻そして行乞流転の旅へ。次々にやってくる不幸に抗えず、いや抗わず、ついに彼は奈落の底での快適な創作活動の環境を手に入れていくことになる。一方、十七世紀のオランダ、当時この国は海運業の発達により黄金時代を築いていた。金持ちの商人達は、こぞって邸宅を飾る自分の肖像を画家に依頼した。卓越した技術は勿論、被写体が最も引き立つドラマティックな設定で描くレンブラントは一躍売れっ子となる。名作『夜警』はそんな背景の中で生まれた。

しかし絶頂期のレンブラント三十七歳の自画像には、悲しげなブードルが足元に描かれている。ブードルは当時金持ちの愛玩犬として飼われていたそうで、この犬に彼の心境が重なっているといわれる。肖像画家として名声を博しても決して幸せではない、本当に描きたい作品は何なのか、自問自答するように苦悩を吐露するように自画像が生まれていく。さらにレンブラントの不幸はいつも女神のように描いていた愛する妻サスキアを若くして亡くしてしまうことにもあった。

心の空洞を埋めるかのように彼が熱中しおたのが骨董収集。アムステルダム古文書館で差し押さえられた財産目録を見ることができた。ラファエルロの絵画から日本の兜まで、ありとあらゆる物が何ページにも渡って虚しく続いていた。

この破産した年の肖像画は眉間に深い皺が刻まれ、疲れきった、それでいてどこか吹っ切れたような五十四歳の表情であった。レンブラントも次の句のような気分になっていたのではないか。

春風のどこでも死ねるからだであるく

時代を超え国を越え、芸術家の一生は光と影を併せ持つ。それはレンブラントの絵画にも似て・・・自由と墮落が混沌と行き交う中から永遠なるものが見えてくるようだ。

光と影ともつれて蝶々死んでをり 山頭火

事務局便り

◇猫養会十月例会(俳諧芭蕉忌)

日時 平成十四年十月十六日(水)

十二時～(受付開始 十一時半)

場所 江東区芭蕉記念館

江東区常盤一の六の三

03(3632) 1448

正式俳諧興行の後、二十韻興行

◇猫養会新会員紹介

西田一枝、小野芳梅、伊藤良重、

吉藤一郎、佐々木洋

◇平成一四年度「猫養会会員名簿」発行

平成一四年度「猫養会会員名簿」を作成いたしました。会員数一七五名、首都圏以外在住の会員は四三名です。

ご自分の住所・電話番号をご確認いただき、誤りがありましたら、事務局(青木)まで連絡をお願いいたします。また、今後住所変更等がありましたら、事務局までご連絡ください。

なお、長期会費未納入者に対して猫養会在籍の意志を確認し、その意志のない方々を名簿から削除いたしました。

◇『猫養作品集XIII』作品募集

一人一巻(捌きは猫養会員に限る)

形式 自由 ただし百韻は不可

書式 四百字詰原稿用紙B4版使用

題・別名・一巡までフルネーム

興行年月日・場所を明記

締切 平成十四年十一月末日

送り先 梅田利子

柏市加賀二・十二・十一

〒二七七・〇〇五一

(註) ワープロ原稿可。ただしB4版の用

紙を使用し、余分な文字は抹消する

こと。また、手書き原稿は正しく楷

書で記入すること。

◇『猫養作品集XII』の訂正

誤 正

P37 花の句 千家千職 千家十職

P156 ウ折立 二十ガワ ニナガワ

◇『猫養作品集』バックナンバー

『猫養作品集』のバックナンバーが若干あります。猫養会の連句作品をさかのぼって学びたいという、新しい会員の方にご案内いたします。残り部数の少ない号は先着順といたします。なお、第一号および第九号はすでに売り切れです。

号数

頒価

第二号

一七〇〇円

第三号～第十号 一八〇〇円

第十一号～第十二号 二〇〇〇円

(送料は発行所で負担します)

・申込み先 梅田利子(住所前掲)

電話・FAX〇四・七一七二・八一一九

◇連句協会会員の方へお願い

連句協会も満二十周年を迎え、猫養会と協会との関係も新しい局面を迎えています。具体的な事例としては、近い将来の『連句年鑑』への猫養会作品掲載を東 明雅先生と事務局で検討中です。

現在の「連句協会会員名簿」の所属欄に猫養会所属を明示していない方は、差支えがなければ「猫養会所属」を明示していただくようお願いいたします。

連句協会年会費納入・『連句年鑑』購入申込みの際、所属欄に「猫養会」と記入するか、連句協会宛に連絡してください。

(電話〇四五・五〇一・四九〇七、FAX〇四五・五〇一・四九〇八)

◇猫養発展基金にご協力有難うございます。

矢崎藍 三万円 荒川有史 二万円

諏訪欣二 三万円 青島ゆみを 一万円

(敬称略)

銀行口座名変更

みずほ銀行新宿新都心支店

普通3376045 猫養基金

佛洸 健悟

六月の一日二日、夜中の二時半頃、ホトトギスの声を聴いた。寝て聴くと病を得るとい

うのを思い出したわけではないが、あの声には起き直らずにはおれない。まず猫が「トツキョキョカキョク」に反応し、戸を掻き開けて教えてくれた。「もう一声」を切望してかな

わぬのがホトトギスだが、この時は寶石箱を闇夜にかたむけるように鳴き声がこぼれた。

『枕草子』では「夜深くうちいでたる声のらうらうじう愛敬づきたる、いみじう心あくがれ、せむかたなし」と大切に描かれるホトトギス、江戸の川柳には「時鳥聞かぬといえ

ば恥のよう」とあるそうだ。初音はウグイスとホトトギスだけに用いるが、ウグイスは別として、ホトトギスの声を待ちわびる習慣はどのようにして成ったものか、色々読んで判然としない。

春の花、秋の月、冬の雪といった季節を代表する堂々の景物に混じり、ホトトギスは夏を代表する。『万葉集』でも一番多く詠まれ、一五六首あるという。五月（陰曆）の訪れを告げる鳥であり、田植の準備を促す鳥とされてきた。それ故時鳥という字が当てられる。

が違う感じがするが、実物よりはるかに分厚いリアリティーを獲得してしまっているように見える。

「しのび音もらす」と歌われるのは、山から里へ下りてくる手前、卯の花の頃のホトトギスの鳴き声を言う。この鳥はウグイスのような留鳥と思われてきたのである。

正岡子規（本名昇）は血を吐くまで鳴く（と言われる）子規におのれをなぞらえた。『病床六尺』の最後に書き付けられた「俳病の夢みるならんほととぎす擗問などにだれがかけた」の歌は、尋常ならざる生涯をホトトギスの悲劇性に重ねている。この歌勿論ホトトギスの鳴き声「天辺かけたか」をかけている。

子規の友人漱石には「時鳥厠半ばに出かねたり」というのがある。「厠にて聴けば凶事あり」という俗信を踏まえたものだが、この捉えどころのない鳥は、向き合う人の憧れや不安を暴きだすかに見える。「借金とれたか」「徳利つけたか」と聞く人もあろうし、『遠野物語』には、姉を邪推してあやめた妹が、「厠丁かけたか」と悔いて鳴くホトトギスになる話が載る。

ほととぎす今は俳諧師なき世哉 芭蕉
元禄前の作だが、芭蕉はどんな屈託をこめたのだらう。いずれにしても、ホトトギスが雀のように身近な鳥だったら、このように詠み続けられることはなかったらう。

—お詫びと訂正—

先号の「猫養通信四十七号」3ページの筆者紹介、「宮坂静雄先生」は「宮坂静生先生」の誤りです。訂正してお詫び申し上げます。

編集後記

奉納二十韻「ご神忌」の巻は、世態人情の妙味を尽した近來稀に見る傑作で、菅公の破顔目に見えるようです。

植木鉢より秋茄子とる

さんま焼くいつしか君はわが背に

天使のやうに受胎告げたり

* *

じゃじゃ馬やつと妻におさまる

押へれば蛇口の水は横に飛び

秘密基地にはメンコビー玉

まことに蕉風の真髓、きつと「忘れられない付合」となることでしょう。なおなおご一緒に精進しましょう。

(英二記)

季刊 「ねこみの通信」
 発行者 猫養会連句会
 編集人 日高英二・玲
 世田谷区代田三・十九・八
 〒155・0033
 印刷所 アート工業株式会社